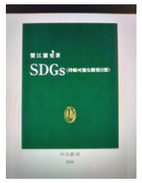
書籍紹介 Book Reviews



SDGs(持続可能な開発目標)
蟹江憲史著／中公新書
2020年8月発行、定価（本体920円+税）

メディアやネットニュース記事でよく見聞きするSDGs。昨今ではSDGsの推進に資する事業を展開している企業・団体等も増え続けています。

しかし、具体的にどういう意味なのか?と問われると即答できる人はまだまだ少ないのではないでしょうか。SDGsとは「持続可能な開発目標」。簡潔にまとめると「世界中の環境・差別・貧困・人権、それぞれ問題を、世界中で協力し合いながら2030年までに解決していこう」という計画・目標のことです。

こちらの書籍はSDGsの基礎的内容や17の目標を1つずつ分かりやすく説明しているのが特徴で、他の本では取り上げられていることが少ない169のターゲットの詳細にまで触れているため、SDGsへの理解が進みます。

著者である蟹江憲史さんは日本SDGsの第一人者として知られており、ポスト・コロナ時代に企業・自治体、そして我々個人はどう行動すべきかを分かり易く解き明かしてくれます。

SDGsについて学びたい方には必見の1冊です。

WARD理事　平田

2021年WARD総会の概要

2021年5月30日(日)　シードエージェンシー3F会議室

Ⅰ　2020年度活動報告

1．5月11日　定例会（zoom）
2．5月31日　定例会（zoom）
3．6月13日　定例会（zoom）
4．6月27日　定例会（zoom）
5．7月18日　ニュースレター封筒詰め・発送作業（神田）
6．9月27日　総会・講演等(感染症を考慮し中止)
7．12月 5日　定例会（zoom）
8．12月16日　定例会（zoom）
9．1月 9日　定例会（zoom）
10．1月31日　定例会（zoom）
11．3月 1日　グリーンバード様と共同開催による清掃活動
12．3月 7日　ニュースレター封筒詰め・発送作業（神田）

※公益社団法人日本ユネスコ協会連盟賛助会員として認められた
※ホームページ及びフェイスブックを活用し、情報を発信した

Ⅱ　2021年度活動方針

1．WARDの意義を宣伝し、仲間を増やす
2．未来を奪われている子孫の存在を示し、その権利を主張する
3．子孫の視点から問題を提起し、解決策を提示する
4．「時間の物差」(時間軸)を普及し、「縦の平等」を推進する

2021年度活動計画

1．SNS等オンラインを積極的に活用し、感染症の影響を受けにくい活動を幅広く展開する
2．会員各々がWARDの活動として、自らが置かれている状況の中で、子孫の代理人としての役割（子孫の立場で考え行動する）を果たす

Ⅲ　2020年度会計報告

収入	予算	決算		備考
繰越金	88,932	88,932	0	
会費	170,000	239,000	69,000	
寄付金	400,000	400,000	0	
雑収入	3	1	△2	利息等
合計	658,935	727,933	68,998	

支出	予算	決算		備考
会報費	100,000	204,202	△104,202	会報2回発送(印刷、発送、駐車料金)
会議費	20,000	0	20,000	借室料他
事務所費	360,000	360,000	0	収入の寄付金(借室、光熱水)
消耗品費	10,000	0	10,000	物品の寄付で賄われた
通信費	40,000	40,000	0	収入の寄付金(電話・郵便)
交通費	10,000	0	10,000	総会中止による
宣伝費	0	0	0	ホームページ(都合により昨年度に支払い済み)
イベント準備費	50,000	0	50,000	感染症の影響によりイベント開催できず
会費	20,000	20,000	0	日本ユネスコ協会連盟
振込手数料	10,000	9,113	887	銀行振込および郵便振替口座
繰越金	38,935	94,618	△55,683	
合計	658,935	727,933	△68,998	

WARD総会及び研修会を開催しました

2021年5月30日曜日、WARD総会と研修会を開催しました。

神奈川県は4月20日から新型コロナウイルス感染症に係る「まん延防止等重点措置」の実施期間にあたり、万全の感染症対策のもと、総会後の予定を若干変更し、特定非営利活動法人FEE JAPANの伊藤代表様による講演と由比ヶ浜でのフィールドワークを実施しました。総会は滞りなく終了し、その後の講演では海岸の果たす役割とその維持について理解を深め、認証制度の意義を学びました。海岸では実際に認証の際に用いられる「ブルーフラッグ管理視察シート」を片手に、認証する側の視点で由比ヶ浜を見ながら散策をしました。

スローガン

―子孫代理人から現代人（自分を含む）への呼びかけ―

1．子孫が生きられる環境と資源を残して下さい！
2．負の遺産（有害物、借金）を残さないで下さい！
3．環境と資源の価値を経済に組み入れて下さい！
4．全ての価値判断は、現時点ではなく、子孫に及ぶ時間で行って下さい！
5．資源循環型社会を築き、資源を保全し、環境を改善して下さい！
6．自然に逆らわず、自然を活用して下さい！
7．戦争は止めて、軍事費を縮小し、地球環境防衛に注力して下さい！
8．世界を１つにして、環境改善と資源保全を地球一元で進めて下さい！
9．未来の人達を苦しめる「原発」を廃止して下さい！

WARD30周年記念総会のお知らせ

第30回WARD記念総会を下記の通り開催いたします。

今年は故渡辺英男会長が世界子孫代理人会（WARD）を設立して30年になります。これまで国内外会員の献身的なご協力により渡辺会長没後も継続することができましたことを心から感謝し、30周年記念総会を下記の通り開催したいと存じます。

記

＊日　　時：2022年４月29日（金）　13：30～15：30
＊会　　場：新橋ビジネスフォーラム
　港区新橋1−18−21　第一日比谷ビル8階
　TEL：03−5843-9169
＊プログラム：13:20　開場・理事会
　13:30　総会　議事　田中事務局長
　13:45　講演　WARD30 年の歩み
　WARD　松香会長
　14:15　講演
　「ミツバチの生活に見る "Harmony on Diversities"」
　元玉川大学教授　干場先生
　15:15　国内研修説明　意見交換及び
　全員でスローガン唱和ののち解散
＊当日の緊急連絡先
　事務局連絡先　090-4754-6706　090-9340-2939
＊会　　費：無料

◆ 会費納入のお願い ◆

正会員の方は1口（2千円）以上、賛助会員の方は1口1万円以上とさせていただきたいと存じますので、是非会費納入にご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、領収書は振込み時の領収控えで替えさせていただきます。

会費納入方法

A．銀行振り込み　みずほ銀行・自由が丘支店　普通2286766
　加入者名WARD
B．郵便振替　00100-3-659238　加入者名WARD

WARD　55号（2022年3月1日発行）
発行人　松香光夫　永井伸一　定価150円
編集人　田中國智
WARD事務局　〒152-0003　東京都目黒区碑文谷5-4-21
TEL 03−5721−1992　FAX 03−5721−8383
http://www.ward-ngo.com

WARD ウォード
World Association of Representatives for Descendants
世界子孫代理人会
to descendants

WARD30周年　SDGsをあなたの手で

WARDが発足したのが　1992年４月ですから、今年は30周年になります。ここ何年か、国連が提唱する「持続可能な開発目標（SDGs）」について触れてきました。30周年の区切りに免じていただいて、もう一度繰り返したいと思います。どこか遠くで聞こえるのではなく、ご自分の取り組みとして見直してみてほしいからです。

最近では、政府機関、各種の企業、環境保護団体をはじめ、学校でも取り上げることが多くなりましたので、皆さんも耳にすることが多いと思います。その例として、「こどもSDGs」と「環境パパ」の２冊を挙げたいと思います。前書は「2030年までに世界の人々が達成しなければならない17の目標」がこどもにもわかるように示されたもので、「学校に通えないこどもが世界にはたくさんいる」とか、「飢えている人がいるのに、食べ物を捨てる人もいる」などのように具体的に示されています。さらに解決策について「家にいてもできること」「家の外でできること」「学校でできること」などとこれも具体的です。目の前にある課題に気づき、それらへの取り組み方を試してみてください。

もう１冊の「環境パパ」は、手前味噌ながら私自身の経験を述べたものです。将来に向けて持続可能な生活スタイルを意識しながら日々の生活を送るには、どのような事件が起こり得るのかを述べた夫婦の交換日記のようなものです。この本を書いたのは20年ほど前のことで、読み返してみると、まさに今はやりのSDGsにつながる記事になっています。自費出版をしたものですが、見直してみて改めて出版を計画しています。読んでみたい方は松香までご連絡ください。

WARD会長　　松香　光夫

1. バウンド著（2020）「こどもSDGs」（株）カンゼン発行
2. 松香洋子・松香光夫（2002）「環境パパ」自費出版

1992年4月29日、WARD設立総会にて講演する渡辺会長

WARD30周年記念研修旅行のお知らせ

当会ではこれまで、多摩川や東京湾三番瀬にて環境保全活動、里山にて植林、下草整備、日の出ごみ処理場の見学など野外活動を行ってきました。今回は30周年を記念し、会員相互の親睦を図りながら、静岡県三島にある特定非営利活動法人・グラウンドワーク三島を訪ね、環境改善活動について意見交換を行い、右手にスコップ、左手に缶ビールという庶民的スローガンを掲げるこの団体との協同活動を含めた1泊2日の研修旅行を企画致しました。

環境活動以外にも三島周辺の名所旧跡を訪ねて地元の食事も楽しむ計画です。6月10日（金）11日（土）の二日間を予定していますので是非ご参加ご検討ください。

詳細は総会及びホームページにて発表します。

東京湾三番瀬での野外研修

コロナ禍に問われる社会の姿

世界情勢は緊迫が続き、オミクロンは衰えを知らない不安な日常世界が続いています。イタリア・ミラノのドメニコ校長の生徒に向けての手紙を「見えない敵が至る所にて、いつ襲われるかわからないという恐怖に囚われたとき、私たちは本能的に、同じ人間をむやみに脅威に感じたり、攻撃の対象と感じたりするものです。―中略―

私たちの貴重な財産―社会組織や人間性―を守るには、理性的な思考を持ってください。命や、愛、友情や自然など、本当に大切なものは何か、理解する機会だと考えてください」と記し、歴史学者のユヴァル・ノア・ハラリは「今回の危機の現段階では、決定的な闘いは人類そのものの中で起こる。もしこの感染症の大流行が人間の間の不和と不信を募らせるなら、それはこのウイルスにとって最大の勝利となるだろう。人間どうしが争えば、ウイルスは倍増する。対照的に、もしこの大流行からより緊密な国際協力が生じれば、それは新型コロナウイルスに対する勝利だけではなく、将来現れるあらゆる病原体に対しての勝利ともなることだろう。」と述べています。私は中学、高校生、大学生に理科や生物、生命科学を教える仕事をしていますが、若者たちに未来社会について漠たる不安を感じさせてしまっている事を実感しています。今の大学生の自己肯定感のなさや無力感は主権者教育や市民教育がなされていないというより、他者理解や共感することの困難性を私たち大人が作ってしまった、社会の脆弱性を彼らに示してしまったからのようです。

だからこそ徹底的な利益重視で競争原理を軸とした新自由主義的な未来社会ではなく、共感し、支え合う事の新しい社会の有り様を若者たちに見せていく教育が求められていると思います。新鋭の社会学者の斉藤幸平氏は「持続可能で公平な社会に向けて、相互扶助と自治に基づいた脱成長コミュニズムへの変革」を著書『人新世の「資本論」』で述べています。

箱ビオトープ

さて、私の勤務校の獨協中学高校では緑のネットワーク委員会という生徒の有志団体があります。永井前校長の環境教育の実践により、屋上に簡易作物栽培用のプランターが設置され、屋上緑化とゴーヤやナス、ピーマンなどの作物栽培が生徒たちによって行われています。

さらにこの活動は、地域の小学校や障害者施設に箱ビオトープを設置する環境ファシリテーターの活動として発展しています。池があり陸地もあり低木も植え、小さな生き物たちの住み場所を木製の箱形にしたものが箱ビオトープです。地域のメダカやエビ等の生きている自然の姿や現物を箱ビオトープとして小学校に寄付し、小学生に箱ビオトープの維持管理のための授業を生徒たちが行ってきました。コロナ禍では、屋上で育てた作物を配布したり、可能な範囲での障がい者施設でのボランティア活動も行ってきました。

誰かのために活動して感謝され、喜ばれるというためだけに委員会の活動は行われています。厳冬の中も泥にまみれ、石を運び、屋上のプランター掃除などを、笑顔も見せながら活動している彼らの姿に「ここに人間の善なるもの、希望がある」と幾度も教えられています。

前述した、ドメニコ校長が生徒に書いた手紙やハラリ氏・斉藤氏の言葉は、緑のネットワークの活動に重なり、彼らの前に立つ覚悟と責任の重さを感じさせます。

（WARD渡辺英男前会長とお話しできた多くの言葉を思い出し、ここに哀悼の意を深く表し、感謝します）

獨協中学高等学校教諭
東京環境教育実戦研究会理事　　塩瀬　治

収穫作業中の生徒たち

障害者施設に収穫作物を届ける

カーボンニュートラルの実現を考える

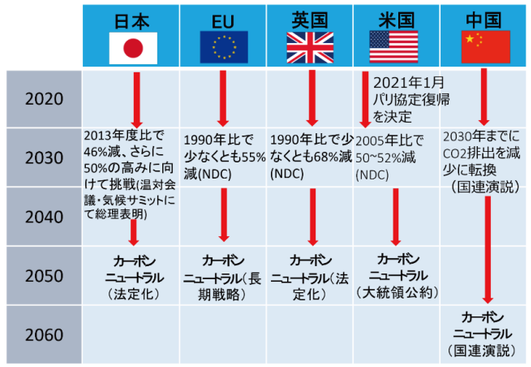
2021年4月現在125か国と1地域が2050年までにカーボンニュートラルを実現することを表明しています。これまでの経緯を振り返った上で、これからの計画を見ると、これまでのペースで対策を進めたのでは到底間に合わないのではないかと不安になります。温暖化対策待ったなしの現在、私たちはどのように生き、次世代にバトンを渡すのか。未来の人たちから地球を託されている私たちは今まさに崖っぷちに立たされていると言っても過言ではないでしょう。

半世紀前の1972年、国連人間環境会議がスウェーデンのストックホルムで開催されました。この背景には国境を超える環境問題や地球の有限性に係る認識がありました。その12年後の1984年から開催された環境と開発に関する世界委員会では「持続可能な開発」の概念が打ち出され、現在のSDGsに繋がっています。38年も前のことです。

WARDが発足した1992年、ブラジルのリオデジャネイロでは環境と開発に関する国際会議（地球サミット）が開催され、180か国が参加しました。日本からは、環境庁長官が政府代表として演説を行い、日本の過去の経験からみて環境保全と経済発展の両立は可能であり、地球温暖化対策を始めとして地球環境問題の解決に向け最大限の努力をすることを表明しました。併せて1992年度からの5年間に環境分野の政府開発援助を9000億から1兆円を目途に大幅に拡充強化することなど、地球環境保全に重要な役割を担う決意を表明しました。この地球サミットの成果として「気候変動枠組条約」に多くの参加国が署名し（その後のCOP会議に繋がる）、また国家と個人の行動原則である「環境と開発に関するリオ宣言」、その諸原則を実行するための行動計画である「アジェンダ21」等が採択されました。リオ宣言では第3原則として「開発の権利は、現在及び将来の世代の開発及び環境上の必要性を公平に充たすことができるよう行使されなければならない。」という我々子孫代理人としてはとても心強い文章も盛り込まれ、世界は温暖化対策に向けて大きく前進しました。

世界が環境問題の認識を共有して50年、リオ宣言から30年が経過しました。この間、世界各国で温暖化対策について様々な努力がなされてきたことは言うまでもありませんが、近年の異常気象による災害の発生状況をみると、状況は年々悪化しているように感じます。世界各国の危機感は高まっているにもかかわらず、その一方で、いまだに自由経済の名のもとで自然環境は破壊され続けています。子孫代理人として「今のスピードで対策を進めていたのでは間に合わない」「もっと実効性のある政策を早急に実施してください」と声をあげなければならない状況です。人類の温暖化対策のスピードが、地球温暖化のスピードに追いつかなければ、地球環境は激変してしまいます。

COP21で採択されたパリ協定では「世界の平均気温上昇を産業革命以前に比べて2℃より十分低く保ち、1.5℃に抑える努力をする」「そのため、できるかぎり早く世界の温室効果ガス排出量をピークアウトし、21世紀後半には、温室効果ガス排出量と（森林などによる）吸収量のバランスをとる」という長期目標が掲げられました。



出典：経済産業省HP

経済産業省が主な国々のプランを表にしていますが、これを見ると欧米諸国は2030年には二酸化炭素排出量を約半分にすることが示されています。あと8年です。EUは複数のシナリオに基づき目標の達成手法を検証しています。また英国はカーボンニュートラルを実現するために必要な電力需要やエネルギー構成などをシミュレーションしてシナリオを作成しています。日本では地球温暖化対策計画が昨年閣議決定され、その中には脱炭素先行地域を2030年までに少なくとも100か所作り、これをドミノ式に全国に増やすことによって目標を達成する「地域脱炭素ロードマップ」なども含まれています。手法はそれぞれですが、どの国も相当な覚悟を持って挑まなければ実現が難しい数値であることに違いはありません。各国ともカーボンニュートラルを産業の成長チャンスと捉えていますが、これには大きな変革が必要ですから、実現するには相当な痛みも伴うことが予想されます。それでも私たちは自国のプランを理解して官民一体となってこの難局を乗り越える必要があります。日本の地球温暖化対策計画については是非環境省のホームページで確認してください。

もはや一刻の猶予もありません。2030年を、そして2050年を笑顔で迎えられるよう、ともに行動しましょう。

WARD理事　　渡辺　宏